

会場風景

**B 分科会 「環境共生住宅」**
県産材を利用した住まいについて

司会 小野 全子（愛知建築士会）
アシスタント 内藤 恵子（愛知建築士会）
出席者 34名

分科会主旨

環境共生住宅を考える上で、地球環境を保全する観点、また、地域との調和を考えた住まい、暮らしにおいて、地域独自の方法で取り組んで来られた2県の方々に発表していただきました。

活動報告

「ふくしまの家地域活性化支援事業」により建てられた展示住宅「木楽塾」

コメンテーター 吉田 紀子（福島県建築士会）

「木楽塾」は伝統技術の継承と地域活性化を目的とし、会津の木材と技術を駆使した耐久性の優れた会津らしい家づくりを目指し建てられた。6年前に「会津産木材供給連絡会」を発足。会津の木の家勉強会を開催し、会津産木材の様々な問題についての話し合い、百年スギ伐採の見学、会津の民家について意見交換をしてきた。そしてコンセプトは「会津の民家の特徴を受け継いだ家」とし、それを持って平成20年4月に福島県の「ふくしまの家地域活性化支援事業」に応募し採択された。主な特徴は、百年スギを使った大径材の柱、アンカーボルトや釘以外は極力金物を使用しない手刻み工法、筋違いは使用せず真壁工法。さらに環境対策と健康素材に配慮した展示住宅とし、生活の中で木に親しみ、その良さを体験。

「森林循環の家づくり」

コメンテーター 池森 梢（長野県建築士会）

長野県の森林の特徴と現状について説明。人工材の多くは、今、間伐が必要。立木から木材を利用した住宅までの過程を山林調査からはじまり、建築のできるまでの事例を紹介。県産材として、アカマツ、カラマツ等を利用。県産材を利用しないとますます森林の整備が滞ってしまうことを説明。木材を利用するためには、大工の技術の向上が必要。

住まいの設計の実例では、デザインにも配慮することで、木材の良さをユーザーに理解してもらうために「森と匠ネット」「森のわっこ」など、様々な活動を行なっている。

建築家×匠の技術×県産材のようなネットワークを作り上げていくことが必要。

意見交換

県産材を使うことの必要性を理解。少ない金物でも手刻みによる加工により耐震性能を確保することも可能であることを確認。公共施設を木造で設計していこうという動きもあり、県産材だけでなく、地域材として、地元の山の木を使っていくという働きかけを設計士として行なっていくことが重要。日頃の心がけとして、森林を守るということを意識し、デザインに配慮していくことが必要である。